

報告5

モンゴル・ロシアにおける匈奴の土城・集落遺跡の
発掘と研究(国際シンポジウム
中国都城考古学の最前線3
——秦漢都城と周縁域都市・城塞の考古学的新進展
——)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 臼杵, 勲 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000315

報告5 モンゴル・ロシアにおける匈奴の土城・集落遺跡の発掘と研究

臼杵 勲（札幌学院大学・教授）

1. 本報告の目的および発掘と研究の経緯

本稿では、モンゴル・ロシアで確認・調査されている匈奴時代の土城・集落を取り上げて、研究の現状と課題を紹介する。匈奴の領域で土城や集落と認識される遺跡は、周囲を土塁で囲まれている、恒常的に使用された建物跡の遺構を持つことなどを特徴として認識されていた。南シベリア・ハカス共和国のアバカン遺跡では、単独の瓦葺建物の存在も古くから知られていた（Киселев 1951）。ここでは、囲壁を持つものを土城、それ以外を集落と呼ぶ。

匈奴の土城・集落遺跡は、1920年代のイヴォルガ城址の発見、1940年代のアバカン遺跡の発見によって確認されていたが、1950年代から本格的に調査・研究が開始され、キセーリョフ、ペルレーらがモンゴル領内で、ダヴィドヴァらが現ロシア・ブリヤート共和国において研究を進めてきた。ブリヤートにおいては、ダヴィドヴァが継続して研究を進め、その後も研究が継承されてきた（Киселев 1957, Давыдова 1995, Пэрлээ 1959など）。一方、モンゴルにおいては、ペルレーによる部分的発掘調査後は、地表調査による遺跡の確認が進められてきたが、発掘調査は墳墓が中心で、土城・集落遺跡の本格的な発掘調査は行われていなかった。しかし、2000年代に入り、外国との共同調査が活発化する中で、土城・集落遺跡の調査も本格化してきた。ボロー遺跡、テレルジ土城、ゴア・ドフ土城、三連城などの調査が代表的である（Ramseyer 2013, 吉林大学考古学院他2020중앙문화재연구원 2018ほか）。また、ハルガニーン・ドゥルブルジンでは、モンゴル単独での発掘調査も行われ、土城・集落遺跡への関心も高まっている。この調査については、報道・シンポジウム等で概略が公表されているにすぎないが、今後詳細が明らかにされていくと思われる。これらの調査では、暖房施設を持つ竪穴住居、瓦葺建物、城壁、門などの遺構やそれらの配置が明らかにされている。

従来の匈奴の研究において、このような遺跡は遊牧民の移動的な生活と直接結びつけるのが困難であるため、例えば中国系住民などによる例外的なものとして扱われてきた。しかし、近年モンゴル・ロシアにおいて、同種の遺跡の発見が増加し、匈奴の社会では一般的な存在であったことが明らかになってきた。また、定着的な遺跡を確認するための方法についても検討が進められるようになってきた。そのため、これらの遺跡を再評価し、匈奴社会における役割や意義を再考する必要があると考える。

2. 匈奴の土城・集落遺跡の分布

エレクツェン・エンフボルドによる集成では2020年までに、モンゴル国内で16か所の土城・集落が確認されていた（Эрэгзэн, Энхболд 2020）。その後、さらにオルホン川流域で数か所の遺跡が確認され、ロシア・ブリヤート共和国で確認されている遺跡を加えると、20か所以上の遺跡が知られるようになった（図1）。この中で、従来知られていた分布地として、ケルレン川流域、セレンゲ川下流域があげられる。特にケルレン川では最上流部にあたるムンゲンモリット村周辺に5か所の土城が集中し、各土城に瓦葺建物が存在したことが知られていた。一方、バイカル湖に近いセレンゲ川下流域では、多数の竪穴住居が内部に存在するイヴォルガ土城が古くから知られていた。その後、囲壁を持たないものの同様な竪穴を持つ集落遺跡が近辺で確認されている。

近年、遺跡の確認例が増加しているのが、オルホン川とその支流の流域である。特にタミル川流域には、タリン・ゴルバン・ヘレム（三連城）などの土城の集中が見られる。また、「单于」銘瓦を出土したハルガニーン・ドゥルブルジンもオルホン川流域の土城である。さらに悉皆的な分布調査によって、エギン川流域でも集落遺跡の存在が想定されている（Wright et al 2009）。ボロー遺跡やザーン・ホショー土城（内蒙古自治区文物考古研究所他2015）のように単独で存在する遺跡も存在するが、詳細な分布調査を進めることで、今後さらに集落遺跡が増加する可能性が高い。土城についても、時期不明とされてきたものが、

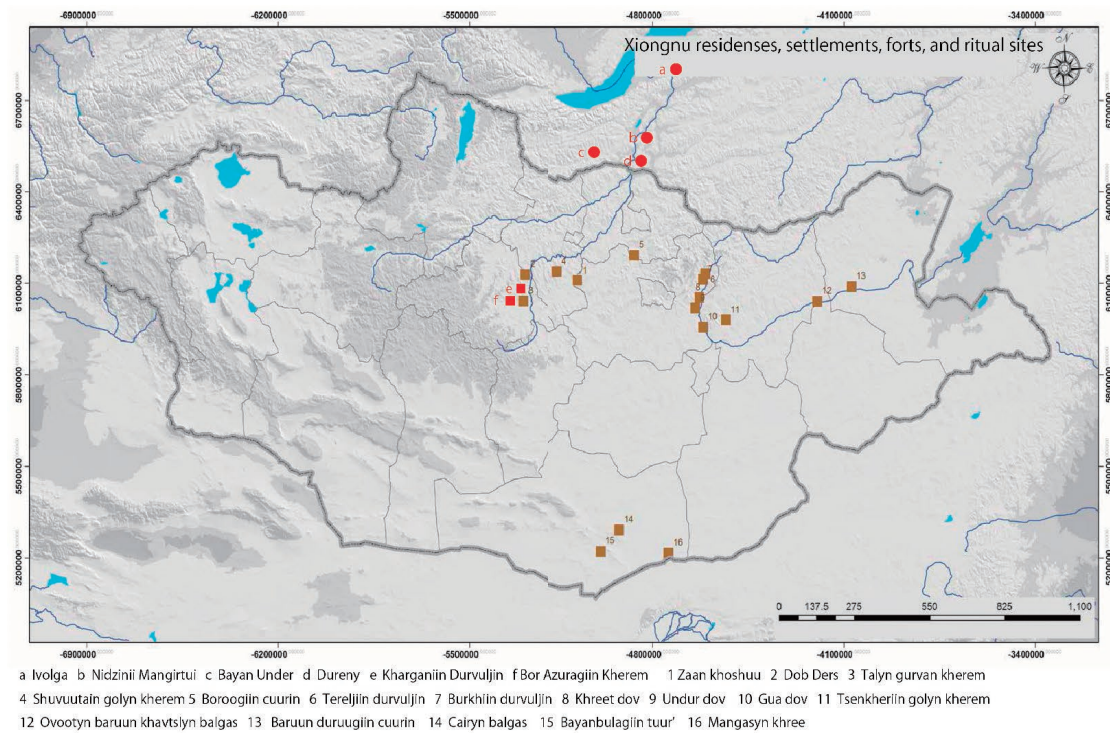
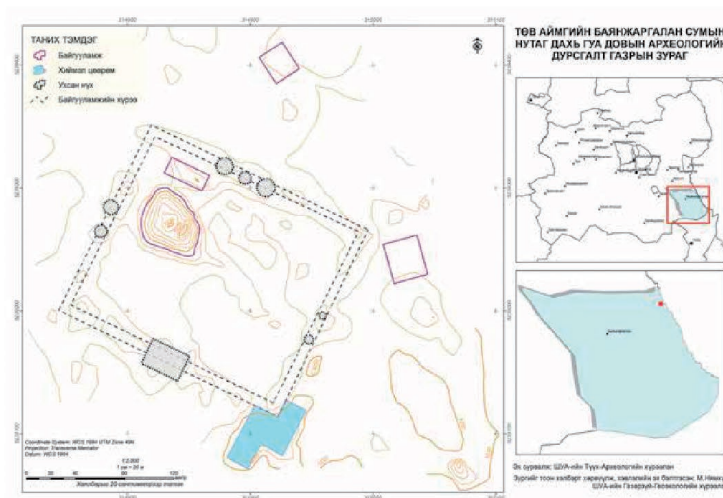
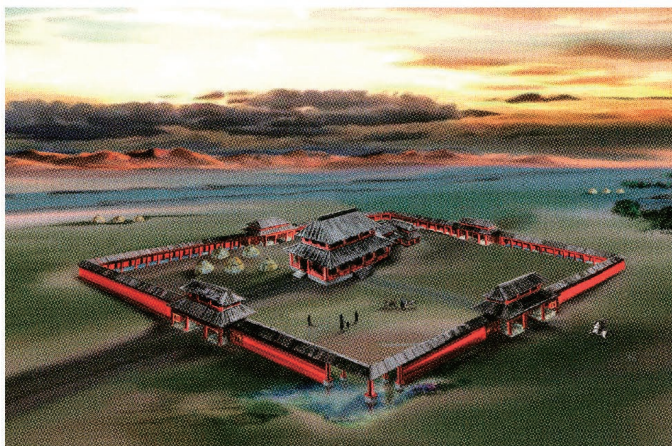


図1 土城・集落遺跡の分布（Эрэгзэн,Энхболд 2020 分布図に加筆）



Эрэгзэн,Энхболд 2020 より



중앙문화재연구원 2018 より

図2 a型：ゴア・ドフ土城遺構配置と復元イメージ

匈奴時代と確認される例もあり、各地で確認例が増えるものと考えられる。

また、南のゴビ地域にも土城遺跡が存在するが、これは漢との抗争に関わる軍事的な機能が高い遺跡とみられ、漢側の築城したものも存在したらしい。ウムヌゴビ県のバヤン・ボラク土城では、30数体の人骨が出土し、匈奴に攻撃された漢の守備兵を埋葬したと考えられている（白石 2022）。

全体的な分布の状況から見て、単于庭が存在した可能性が高いオルホン川流域に、集中地点があることが明確になり、匈奴国家の行政・軍事と土城・集落遺跡が具体的に関わることが予想される。

3. 土城遺跡の分類

集落遺跡は、竪穴住居が確認された例以外は、遺物の散布で確認されているため、内容を把握することが困難であるが、囲壁を持つ土城遺跡は、建物配置などの遺構の特徴や遺物の散布から分類が可能である。土城全体の平面形は方形が基本であり、正方形ないし長方形に近いものが多く、方形に回した土塁の内部に建物が配置される。以下のように類型化できる。

a 型：中央に大型建物、周囲に小規模建物が配置。基壇建物、礎石建ち、瓦葺（図2）。大量の遺物が出土。

b 型：中央に大型建物、周囲に小規模建物が配置。基壇建物、瓦葺きせず（図3上）。遺物少。

c 型：目立った建物が存在しないか、少数（図3中）。

d 型：複数の竪穴住居と貯蔵穴が配置。暖房施設があり通年居住（図3下）。工房も存在。出土遺物は多量。

a 型・b 型ともに建物間を廊下状の遺構で結ぶ例が見られる。また、a 型には貯水池（池）を有するものがある。

以上の分類を地域別にみると、ケルレン川流域は、a 型が中心である。一方、オルホン川流域はb 型が中心であり、「単于」銘瓦を出土したハルガニン・ドゥルブルジンに例外的である。また、セレンガ川流域は、土城としてはイヴォルガ土城がd 型であるが、他に2ヶ所の竪穴集落遺跡が知られており、竪穴住居から構成される遺跡が中心といえる。ゴビ地域の土城はc 型が多い。

4. 土城・集落遺跡の機能

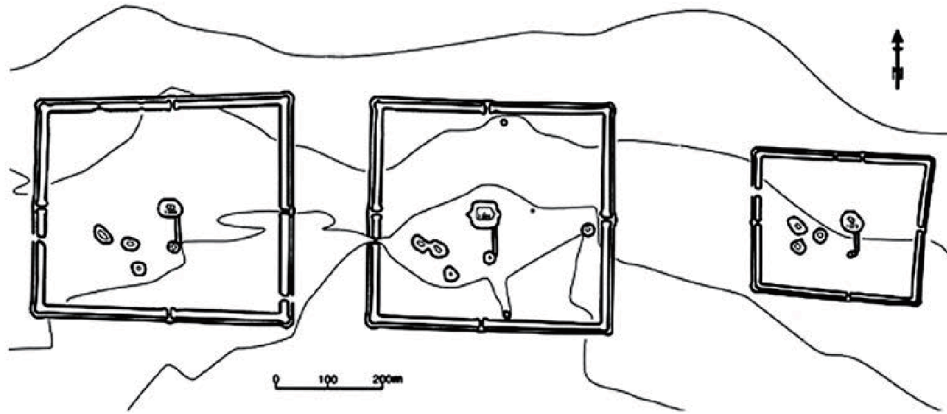
多くの遺跡が未調査であり、それぞれの内容が詳細に明らかにされていないため、予測的な見解ではあるが、エレグツェン・エンフボルドは匈奴の土城・集落遺跡の機能を以下の5つに想定している。集落・工房については囲壁を持たないものも含んでいる。

- 1 王族・貴族の宮殿・居館
- 2 儀式・宗教的施設
- 3 軍事的砦
- 4 集落
- 5 工房

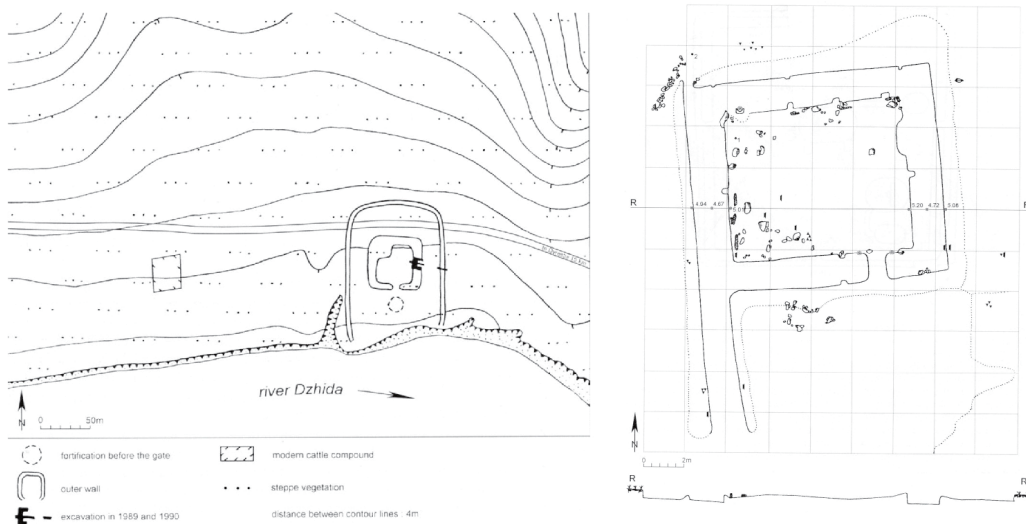
先の土城の類型から、建物の構成や遺物の量を参考に、以下のように整理できる。

- a 型 → 機能1
- b 型 → 機能2
- c 型 → 機能3
- d 型 → 機能4

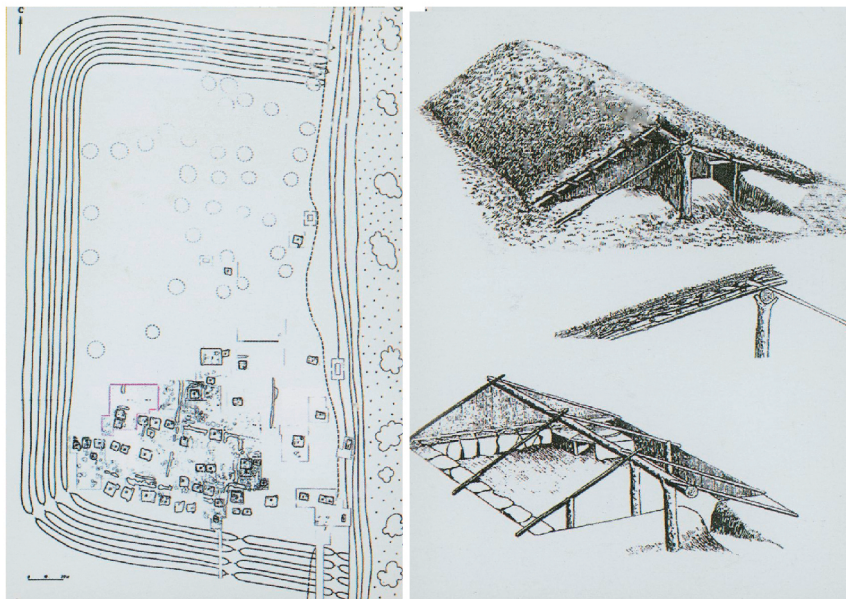
a 型の土城に貯水池を有するものがあることは、宮殿・居館としての機能を有していたことの裏付けとなろう。また、a 型とb 型は建物配置などに共通性が見られ、設計自体は共有していたと考えられる。公



b 型：タリン・ゴルバンヘルム（三連城）吉林大学考古学院他 2020 より



c 型：バヤンウンデル Danilov 2011 より



d 型：イヴォルガ城址 Yarsolavtseva 2011 より

図3 b・c・d 型土城の類例

的な建築・土木についての規格が存在したと考えられる c 型の機能を考える上で参考になるのが、ロシア・ブリヤート共和国のバヤン・ウンデル土城である (Danilov 2011)。約100m×70mの方形土城であるが、中に約50m四方の内郭を持ち、その北東隅に土塁を利用して壁建ちの部屋を築いているが、他に目立った建物は無い。同様な構造は、居延などに見られる城砦跡に類似しており、軍事的な施設と考えられる。

なお、5の工房については、工房の存在が想定されている集落遺跡も存在するが、生産が主目的な場として、製鉄工房・窯業工房が集中するホスティン・ボラク遺跡群をあげることができる。ここでは、竪穴住居も確認されており、一定期間の居住が行なわれていたと考えられるが、暖房施設を持たないことから、季節的な利用など一般的な集落とは異なることが予想される。また、製鉄工房については、アルタイ地域からモンゴル東端部まで広く確認されており、鉄生産活動が広範に行われていたことがわかる。

各地域の主要な土城型式から見ると、地域別に土城の機能が異なることが予想される。オルホン川流域では単于の宮殿以外は、瓦葺建物などの中国的要素を除外した匈奴の集会・儀礼の場としての機能が重視されていた可能性がある。一方、ケルレン川流域では宮殿・居館など、匈奴支配層の威信財としての役割や外交・政治の場としての機能が重視されていたかもしれない。また、セレンゲ川流域では農業活動なども行われていたことから、生産基地としての機能を持たされていた可能性もある。この近辺には囲壁を持たない集落も複数確認されており、他地域とは異なる様相がうかがえる。また、窯業遺跡の中でも瓦工房は、a 型土城との関連性が強く、土城建設と同時に計画的に設置されたのであろう。

5. 土城遺跡の設計・規格

次に、土城について、その平面設計や規模から考察する。タリン・ゴルバン・ヘレム土城群（三連城）は、東西に3つの方形土城が並ぶ遺跡で、西からⅠ～Ⅲと番号が付けられている（吉林大学考古学院他2020）。このうち、Ⅰ・Ⅱはほぼ同規模であり、周長は1700m前後、1辺400～460mとなる。Ⅲはやや小型で約1100mである。Ⅰ・ⅡはⅢの1.5倍規模である。これを漢尺（1尺約0.23m）に換算すると、Ⅰ・Ⅱは周長7200尺強となり、1辺約1800尺（300歩＝1里）程度の規模が想定されていたと考えられる。Ⅲについては1200尺（200歩）程度の規模が想定できる。また、正司哲朗氏の研究によれば、それぞれの土城は、方位がややずれるものの中心建物は一直線に配置されており、一定の計画・設計の下に築城されたことが確認されている。

同様に現在確認されている土城を、規模で分類し、それぞれの方形の長辺を漢尺に換算すると、以下のような規格が想定できそうである。

特大：長辺400m以上 → 1800尺：300歩：1里前後

大型：長辺340m前後 → 250歩前後

中型：長辺約200～250m → 150歩前後

小型：長辺150m以下 → 100歩以下

このような企画が、土城の機能・用途に応じて割り当てられたことが考えられる。なお、タリン・ゴルバン・ヘレムⅠ・Ⅱとはほぼ同規模の、ボロ・アズラギン・ヘレム土城が存在することも、設計・規模に規格が存在したことの傍証となろう。また、この遺跡では中国・モンゴルの共同調査により中央の建物跡が発掘されており、柱列が整然と並ぶ様子が明らかにされた。当然綿密な設計に基づいて建てられたことは明白であり、設計・規格の存在を示している。規格性の内容が詳細に明らかになれば、土城遺跡の帰属時期の判定にも一定の目安とできると考える。

ただし、以上の想定は正確な測量成果を経ていない略測値に依拠し、遺跡の年代についてもさらに検討が必要なため、現状では予備的な研究にとどまっており、正確な測量・計測値によるより詳細な検討が必要であることはいうまでもない。ここでは、あくまでも土城の築造に規格が存在したかを検討するための目安として考えていただきたい。

6. 今後の課題

特に土城遺跡は、地表で確認が可能なため、確認数が増えているが、調査例はそれほど多くない。設計・構造等のより詳細な分析を進めるそのため、本格的な発掘調査はもちろんであるが、高精度の測量、試掘調査及び年代測定等の分析を通じて、個々の土城の年代を確定し、遺構の種別や配置の確認例を増加させていくことが必要である。それらの成果を活用することで、史料に残る歴史事象と実際の遺跡を結び合わせていくことが可能となろう。

また、城壁や大型建物を持たない集落遺跡は、地表での確認が難しいため、そのため、時期や正確な遺構配置・規模などが不明なものが多い。そのためには、悉皆的な分布調査と試掘調査が必要であり、そこから発掘調査へと展開することが可能となろう。

また、墳墓群と土城・集落遺跡の関連性についてもまだ、検討が十分にされてはいない。オルホン川流域では、大型墓を含む墳墓群と土城とは比較的近い位置関係にあるが、ケルレン川上流域では、宮殿・居館と考えられる大型土城が集中するにも関わらず、近隣に有力墳墓群が存在しないなどの違いがあり、地域による差がみられる。これは、匈奴国家の統治体制の地域性を反映している可能性もあり、さらなる検討が必要である。

しかし、これまで墳墓の調査研究が主体であった匈奴考古学において、土城・集落や生産遺跡を視野にいたれた新たな研究の方向性が明確になってきているといえよう。

参考文献

- 臼杵勲・佐川正敏・松下憲一2017「匈奴の建造物・住居」『札幌学院大学人文学会紀要』102号
- 白石典之 2022『モンゴル考古学概説』同成社
- 吉林大学考古学院他2020「蒙古国后杭愛省烏魯木齊市蘇木和日門塔城址発掘簡報告」『考古』2020-5
- 内蒙古自治区文物考古研究所・蒙古国遊牧文化研究国際学院2015「蒙古国布爾汗省達欣其楞蘇木詹和碩遺址発掘簡報」『草原文物』2015-2
- Danilov, S.V. 2011. Typology of ancient settlement complexes of the Xiongnu in Mongolia and Transbaikalia, *Xiongnu archaeology; Multidisciplinary perspectives of the first steppe empire in inner Asia*, Bonn
- Ramseyer, D(ed). 2013. *L'habitat Xiongnu de Boroo gol*, Infolio, Gollion.
- Wright, J.W., Honeychurch, Ch. Amartuvshin 2009. The Xiongnu settlements of Egin gol, Mongolia, *ANTIQUITY* 83
- Ramseyer, D(ed). 2013. *L'habitat Xiongnu de Boroo gol*, Infolio, Gollion.
- Yarsolavtseva, L. 2011. *The Ivolga fortress of the Huns*, Booklet, Ministry of culture of the Republic of Buryatia, Ulan-Ude.
- Давыдова, А.В. 1995. *Иволгинский археологический комплекс Том I: Иволгинское городище*, Санкт-Петербург: Koukogakuiko2 020 Dani Yarsolavtseva
- Киселев, С.В. 1951. *Древняя история Южной Сибири*, Москва.
- Киселев, С.В. 1957. Древние города Монголии, *Советская Археология*. №2, Москва.
- Пэрлээ, Х. 1959. К истории древних городов и поселений в Монголии, *Советская Археология*, №3, Москва.
- Г.Эрэгзэн, С.Энхболд 2020. Монгол нутаг дахь Хүнгийн хот сууринууд, *МОНГОЛЫН ЭРТНИЙ ХОТ СУУРИН: МОНГОЛЫН АРХЕОЛОГИЙН ӨВ, Х Боть*, Улаанбаатар.
- 중앙문화재연구원 2018『흉노고고학개론』, 진인진, 과천시 (中央文化財研究員編『匈奴考古学概論』)